
秘の非対称の碧眼

模造堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘の非対称の碧眼

【Nコード】

N9535U

【作者名】

模造堂

【あらすじ】

三十代で彼女無し、非対称の両目から珍しがられるが、それが自分の運命を変えるが、ドーナツ店の店長という自営業者で戦闘能力皆無、その為祖父から渡された資金を元に逃亡を図る。

しかし逃亡先で変な手紙を見つける。

読書の皆様には申し訳ありませんが、主人公は基本的に戦闘能力は高いのですが、才能は高くありませんその為に徐々に強くなる予定です。チートがお好きな片は偶にはこんなものでもどうですか

現在190歳、生身ではある意味最強ですが、力馬鹿の一言です

エピローグ？、逃亡の果てに

エピローグ 1

三十歳の誕生日、祖父からもはや隠し切れないと話し、法珠機関と呼ばれる秘宝を集め管理する組織から逃れるために秘宝の事を説明された、単純に一言片目の碧眼。

碧眼の方はかつて失明し移植手術で見えるようになった。

その碧眼は水の精霊王を封じている秘宝で、その気になれば引き出せる、今まで高校を卒業してドーナツの店を切り盛りし、カナリアのような非対称の両目から珍しがる者が多くよく写真に取られていたが、美形ではないのでそう目立つような、目立たないような、ただ静かな生活を送っていた、強いて言うなら彼女の居ない時代が長かった。

その使い方を学んで逃げることになり、祖父の伝手でとある田舎町に逃げ込んだ、逃げ込んだ町の自宅で一通の手紙が届いていた、異世界に行きませんか、ただいまキャンペーンでもれなく美容効果もありと怪しげの大きさがショッピングモール並みに大きい、相手はプロ、こちらは素人でこれといった戦闘に関係する特技も無い、その為に手紙の元に向かった。

「はい」

ドアが開く、怪しくは無いが一般的なマンションの一部屋だった。

「手紙を」

「あ、お待ちしていました当選者の方ですね」

「そうなるかな」

「まま、中へ」

「それではお邪魔します」

中に入った瞬間目の前の世界が一変し廃屋のような部屋になっていた、事情がわからず、部屋に案内した女性は見当たらず、部屋を調べたら新聞が膨大にあった。

その新聞を読み漁り、法珠機関が法珠を管理運営する国連特務機関の統一組織である事がわかった。

祖父から聞けば荒っぽい連中だと思ったがどうやら違うようで、安心して暮らせそうなのでこの町で暮らすために、祖父から逃走資金の百万で非合法な戸籍を買い、残った資金で仕事を探していた。町の本屋で地図を買いハローワークで仕事を探す日々で、ドーナツ店のアルバイトを見つけ手続きをして面接の日時を決め、明日会う事になる。

ようやく見つかった仕事だけに、うきうきしながら帰る中人の断末魔のような絶叫を聞いた、もちろん田舎町で人数も少ない道で人々は携帯のようなもので通報し様としていた。

私はその頃には絶叫の聞こえた方面に走り、その場を目撃した、法珠を奪うために法珠機関銃を持って撃ち出す者達、法珠の力で倒そうとする者たち、どう考えても法珠機関の者が法珠を奪おうとしている裏側を見てしまったことになる。

（結局変らない法珠を奪うか）

使い方を習った方法であちらこちらのマンホールから水流が上がリ、それが龍の形をして法珠機関銃を撃つ者に襲い掛かった水流に飲み込まれ壁に叩きつけられものゆわぬ軀と化した。

幾龍の水流が法珠機関銃を持つ者達に襲い掛かり殆どが即死し。

残ったものは逃げようとして高圧水滴で足を撃たれ、悲鳴をあげながら逃げようとする。

「一つ聞きたい何故法珠を奪う」

「欲しいからだ、下っ端だからそれぐらいしかわからない」

「なら携帯と武器を置いていけ」

下っ端と自称する者達は幾人が居る程度で携帯と武器を置いて、片足を引きずりながら逃げていった。

生き残った法珠を持つものから代表者が出てきた、一礼し、こちらはお辞儀した。

「お強いですが、何者です」

「ドーナツ店の亭主だ」

暫く沈黙が続き、嘘は言っていないと判断したようだが、迷っている事も確かのように。

「携帯と武器は持っていく一つずつ、そして君達から法珠機関の情報を知りたい」

「いいでしょう」

法珠機関は法珠をオーパーツと公表し、発掘作業で見つかるものとして定着しているが、実際は法珠を持つ人を殺して奪い、口封じの意味もあるようだ。

相手方の情報をメモリーで受け取り、帰宅した、それまで警察が捕獲し様としたが水龍が吹き飛ばし、重傷を負わせる結果になる為に警察もしつこく追いまわさなかった。

帰宅すると家屋は戻っており女性が屋内に入れるその瞬間に戻っていた。

「一つ聞くが時空を操る法珠は有るのか」

「はて何の事でっしゃろ」

「白を切っても無駄と思うが、別に関係ない話しだったな」

「クール！さすがウォータークラウンの男」

「この時代に居られる時間は」

「一週間で長いほう」

「やはり修正力か、現実には小説より奇なりか」

「お早めにお仕事済ませたほうが良いですよ」

祖父の下へ急いで戻り、メモリーを渡し、法珠機関銃を渡し、祖父の人脈で法珠機関に対抗する組織を作り、携帯も渡した。

組織化されながら徐々に相手を撃退するようになった。その組織化の資金源として未来で知った情報から公的ギャンブルの当て金で賄い僅か四日で数十億の大金を持つようになってそれを組織に回した。

襲ってきた法珠機関の尖兵を水龍で即死させ、残った尖兵に高圧水滴を打ちながらネット上で公開しながら話させ、法珠機関が表舞台に立ってしまい、これで法珠機関はほぼ終ったに近い、最後に法

珠機関の尖兵をテレビ局に出させ、洗いざらい話させた。

ウォータークラウンの男と呼ばれ、修正力から未来に戻った。

現代でないのは何故かはわからないが、心残りは祖父の事だった。

祖父と暮らしていた神社はNPOが管理しており、祖父からの遺書を読ませてもらった。

あの後法珠機関は捕獲されるか、殺害されるかなので法珠はオーパーツとして保管され、また個人が持つものは管理及び査察の対象になっていたが、裏側の無い話だった。

人類は宇宙に進出しており、別の太陽系に進出した様子で、その募集もされていた。

その募集に参加した。

「どのような経歴ですか」

「戸籍が無いのでホームレスでした」

「しかし法珠反応があります」

「片目が法珠です」

「は？」

「失明して、片目に埋め込んだんです」

「そ、そうですか、応募は受理されました、戦闘訓練などサバイバルもかねて行われますので、新期生なので案内に従ってください」

それから一年様々な訓練を受けて、あまり才能が無い事がわかったが、宝玉使いとして重宝がられた。

そして宇宙ステーションからゲートを通ったはずだった。

目の前に俗に言うエルフが居た、ラノベの定番種族だ。

金髪碧眼、波打つような癖毛のプラチナの煌き、神々しいまでの神秘性、ご来光がかかりそうなほどに美しい人形のような玲瓏とした顔立ち、細身の華奢な体。

なのだがどうも背丈が違う、まるで赤ん坊の様に小さい、声も出せないエルフの女性は抱きかかえ私を運んでいった色々有って赤ん坊ライフを送り、エルフではないが同じように育ててもらい五歳のときプレスレットを買った。

言葉がわかるようになり、意思卒も可能になり、両親が元冒険者で兄に当る人は冒険者を目指していた、エルフに寿命は無いらしく私もハーフエルフとして生まれたようだ。

ここが何処なのかは少しだけわかった俗に言う宇宙船が大気圏に突入した場面を見たからだ。恐らく人類とは違う文明が違う惑星で、入植はしない事になっている。

そんな惑星にトラブルでこうなるとは思いもよらなかった。

ハーフエルフの成長は早く十五歳で兄と肩を並べるほどになった。

「本当にハーフエルフは早いよな」

「早いね、兄さんも強くなった」

「俺は旅立つぜ、どこで会ったら話そう」

そうして兄は旅立った、それから100年と35年で150歳になりハーフエルフだけに成人の儀が行われた。

そうなると成人で村八分にはならなかったが、年若いエルフからとても嫌われ。冒険者になるために森を出た、どのみち嫌われている以上どうなるかわかったものではない。

両親が見送り、冒険者として大陸地図で確認した町に向かって歩いていた、ただ体力不足が深刻だった。

到着した町は酷い有様で戦争の後の様だ、しかし人々の目には希望が見え、冒険者ギルドの支店に入り、冒険者ギルドの屋内で受け付けの人間の女性の前に立った。

「何か御用ですか」

「冒険者になりたいのですが」

「ハーフエルフがですか？」

「ええ」

「止めた方が良いですよ」

「理解に苦しむのですが、ここは受付で相談所ではないと思いますが」

「そうですね、こちらにお名前を」

出された冒険者の規約を読み、名前を記入した。

受理され晴れて冒険者になった。

依頼は掲示板に貼られ、その中から水不足で深刻なエルフの森の依頼が有った、額としても申し分なく、一人で行く事になった。

武装もなしで防具も無い、旅道具もなし、困り果て銀行から資金を借りた、僅か一万程度、一回の宿泊で吹き飛ぶ値段だ。

道具を何とか最低限備え、依頼の場所に向かった。

途中襲われること何度も有ったが水龍を出すと逃げ出した、そうしてエルフの森につく。

森の木が枯れかけている、急いで森に入ってエルフの村についた、守りも出来ないほどに水に困っているようで脱水症状が見て取れる。

「冒険者ギルドから依頼を受けましたフェニックスと申します」

「水を」

「はい」

地下水流のある場所から水を操り噴出させた、それを何個も行い、少しやりすぎかなと思って戻った。

人々は水だと喜び川から水汲みをしていた。

エルフの人々から感謝され、依頼金の上に様々な宝物から載せられたが依頼料だけ貰い帰還した。

冒険者ギルドに依頼の報告をするとかなり驚かれ、報告を求められたが地下水を汲み上げたと報告しておいた。

「凄いですね」

「よくわからないけど」

「そうですか？いくら精霊との相性のいいエルフでもこうは行きませんよ」

「水と風の祝福を」

「もう少し話ませんか」

「何かな」

「ギルドをご存知ですね」

「知っているけど冒険者ギルドとか銀行ギルドとか」

「いろんな冒険者や生産系のクラスが入ったギルドがあります、色々と噂に聞くでしょうがドラゴンフィーバーというギルドです」

「どんな組織かわからないのですか」

「組織では有りませんギルドに所属して、舞い込む依頼をこなすのです」

「冒険者ギルドに所属しながらですか」

「所属は有る無し関係有りません、冒険者ギルドからも依頼があります」

「何処にありますか」

「港町エベリンです」

「気が向いたら、行ってみます」

「それまで冒険者の依頼をよろしくお願いします」

「もちろんです」

こうして冒険者ライフが始まった。

それから銀行に借金を返済して装備品を揃え、いくつかの水不足、水路作りなど水関係の依頼をこなし、水の精霊使いとして知られるようになった。

各国の治水事業にも関わり、その知名度は高まる一方だった。

そうした中、賢者フリップと名乗るエルフの女性が現れた、それもこんな風に一言。

「ハーフエルフの坊やよろしくね」

まるで押しかけ妻の様だ。正直うんざりするほど、もしくは辟易。

とにかくお喋りで無意味なまで知識に貪欲、人が使うありとあらゆる精霊を使い、どの精霊も満遍なく使えるが、最上級は使えず、器用貧乏のような短所も無く長所も無い。

大酒は飲むわ、タバコは吸うわ、破天荒な性格ながら、交渉ごとにはかなりの方で、伊達に賢者と名乗っていないので、交渉人として手伝ってもらっている。

その中で冒険者アカデミーが創設され、それが各国がスポンサーに付き、大規模な総合アカデミーに拡充した、試験さえ通れば誰でも入れると噂を聞いて、旅の連れが是が非でも行きたいと言い出し、実際に向かった。

よくよく考えると、まともに勉強した機会が無いので、受かるかどうか不安で、旅の連れに学問を教えてもらっていきながら、旅は続いた。

アカデミーに到着すると拡張工事は終わったようで、新規に生徒を募集しますとあった。

「受験料とるの？」

受付の女性は困惑したようにうなずく、それにフリップが食って掛かり受付の女性は今にも泣きそうだ。

「これぐらいでいいかな」

置いた共通紙幣を受付の女性が数え、案内する係りの人が誘導した、その顔には若干怯えがあったのは、間違いなくフリップのせいだろう。

受験場に案内され、決まった時刻に始まった、意外な事に今まで習ってきたことが生かせて、難なくクリアした。

何回かあつて、さすがに賢者と名乗るだけあつて、私より先に終わらせ、欠伸をしながら眠り始めていた。

「はい終わりです、解答用紙を集めます、手は机から離してください」

「マジダリイ」

「それはどこで習った方言ですか」

「珍しい人々」

「そうですか」

「黒目、黒髪、非対称の碧眼を探しているそうよ、もっとも銀髪、緑目に碧眼のあんたの場合は含まれないけど」

「その人々は当方の列島に居たかたがたですか」

「全然違う、学んだけどあたしでは力量不足で学べなかったわ」

「フリップ・デートリットと言うのですね、初めて知りましたよ」

「スルーか?!」

「よくわかりませんが、敢えて突っ込まないでおきます」

「その突っ込むて何」

「とある国でボケた発言をしたものに訂正する行為及び発言のことです」

「ハーフエルフなのに結構あちらこちら言っているね、感心だよ」

「その保護者的な発言はどこから、おそらく学費も私が持つと思います」

「勉強教えた分かな」

「残念ですが今までの旅費は」

「色々あったよね」

「保護者の様な発言は止めて、どちらが保護者かわかりませんか」

「む」

「金のかかることは一切私で、後始末も私ですから」

「……そうだった」

「保護者ならちゃんとしてください」

「旅の連れということだ」

「そういうことになりますか？」

「ええやないけえ」

「それよりもう終わりのようですよ」

お喋りしている間に解答用紙は回収されてから、満員だった試験場は数える程度だった。

試験官より指摘されて、丁重に礼を言つて試験会場から出た、発表は明日のためにそれまでホテルに泊まった、大酒のみが珍しく酒を飲まず、果実ジュースで終わらせていた。

明日になり発表が書かれたアカデミーの合格番号を探して、やっと見つけられた、ついでにフリップもついでに探せばあった。

エピソード？、逃亡の果てに（後書き）

訂正しました、感想、評価をよろしければ

エピソード？（前書き）

久しぶりに書いて見ましたが方向性が変化しました。なにとぞご容赦の程を、そして今まで書かないですみませんでした。

それではエピソード後編開幕

エピソード？

エピソード？

今学園に居る、それも21世紀初頭の現代、私が未来に戻る頃だ。しかしここは並列世界、馬車に撥ねられ色々あり、剣と銃と幻想と詩の学園に通っている通称トトトノ学園、幻想とは幻想機と呼ばれる戦闘機、規格があって互換性を持つのが最大の特徴の汎用機、どこその機械に近いが、これは致し方ない理由があった。

開発速度の異常な進歩だ、単機生産なら生産中に旧式になる、その程に劇的に成長している現状で、少しでも遅れを取らない為に規格があり、それはEUの様なとあるゲームのような世界情勢、それを一変させかねない軍事的価値を持っていた。

そして詩とは魔法のことだ。

補助機械を使うことで森羅万象を操る、それが幻想機に劇的な影響を与えている。

座標を軸に様々な過程を踏んだ後にロックし、圧縮された文字魔法のプログラムを開放する機能を持つために、未知の領域であった魔法すら手にした。

何故人類が持たない魔法があり、幻想機の開発に躍起になっているかといえば生まれ変わった世界から、魔法による安定した異世界を探索した魔法使いが、成功を収め、本人の名前からヘブン・ゲートと呼ばれる異世界との交流を持つことになった。

日本にゲートを持つために、自然と日本に施設が集中した同時に、

魔法技術と科学技術の交流から人類も魔法というものを手にしたのだ。

文字魔法がローマ字の為に、世界中に広まっていたプログラム言語から様々なOS生まれ、それを規格に持つていくために、国家共同体から始まり、未だに国際的な規格は生まれていない。

幻想騎の正式名称をGONSOKIAKISI、文字通り幻想核騎士である。略しGS、着せ替え人形と称す者は、引かれるか、同類が笑っただけだ。

どちらにせよ魔法を手にした地球の人類、科学技術を手にしたラレアルの人類、それはヘブン・ゲートの国際管理によってあまり珍しくも無くなった、極普通の日常と化した。

そう僅か十年で。

そう十年の空白が有る、それは話すまでも無い、何故なら今すぐに分かるからだ。

雨の中水面に移された姿が変わる、艶やかなプラチナブロンドの腰元まで伸ばし、異常に感じることもなく、実際の年齢は知らないが十代中盤の最後の十六歳、愛くるしい碧眼の切れ目、優美な眉は形が好く、鼻梁は高く、小口は桜色の花弁のよう口唇、欧州的美少女の顔立ちになっている。

スリーサイズは見応えがありモデルのような痩身ではなく砂時計体型の豊かな胸に見事に張った腰回りから伸びるスラリとした足、明らかに性別まで変異している。

そう私が魔法を使えば性別が換わり、能力の一つの神具の武具で具足（星竜）生体甲殻装甲甲冑を身に纏う、零下二百度にも耐えら

れ、摂氏数百度の高温にも耐えられ、真空に近い状態にも耐えられる生物としてはアフリカに住むユスリカの幼虫の能力を吸い取ったものだ、ただし相手は千年を生きたエンシェントドラゴンの星竜から手に入れたものだ。

これは空白の十年で手にしたものだ、別に冒険をして手に入れたわけではない、否応無く手にしたものだ、そう否応無く。

現代では新コロニー計画、外宇宙に居住空間を生み出すべく計画はスタートした、試作型は沖縄県那覇市沖合に建設されたが、遺伝子戦役と呼ばれる世界規模の戦争で新コロニー計画は一時的に凍結されたが、戦後七姉妹都市と呼ばれる海上自由都市を七つ組み合わせた大都市を建設した。

戦後多くの国家は生き残りをかけて地域ごとにブロック化に専念。北米、南米、ヨーロッパ、北部ユーラシア、西アジア、中央アジア、南アジア、東南アジア、東アジア、オセアニア、太平洋、大西洋、アフリカ南部、アフリカ地中海沿い、アフリカ中央部、十五地域のブロック化。

技術により遺伝子を弄ることは条約で禁止されるが行われているのは公然の秘密だ。

遺伝子の権利を主張する北米の対しそれ以外のブロックは問題として認めなかった。

また国際企業の発展に伴う多数の企業体も生まれた。その中で最大の企業体に位置するヴィーナス企業体が生まれた。

ヴィーナスの特徴は情報を売り買いし情報機器の販売、開発から様々な技術開発、直接の生身での稼働を可能とする機械装甲服俗にパワードスーツと呼ばれる、着る機械の鎧だ。

そして自ら開発した遺伝子技術から遺伝的に優れた存在を生み出そうとした。しかし、それは成功しなかった公式的にはそうになっているが、成功し通称ジーンネイターと呼ばれる後天性遺伝子調整者が生まれ、その直系の子孫である子供が生まれたそれがインヒレト・ジーンネイター、全く違う種ではなく先天的に優れた遺伝子を持ち合わせているだけの存在。

少なくともそう教えられた、だが現実を引き起こされた変異遺伝子保有者により遺伝子戦役での天然種との確執は大きく、世界は戦争にへと突き進んでいた。ただある哲学者が尋ねた、何を持って優れたという基準を作ったのか？戦争に突き進む世界はその一言で優れているという基準を明確に持つ必要があると判断するしかなかったが、人口が膨大で必要とされる社会の労働者に求められるのは機械のような定められた作業を行う存在ではなく大きく分けて二つに分かれている。機械では行えない知的作業、機械では行えない労働力を提供すること

ただ世界中が統一された世界ならまだしも、混沌とした世界で優れているとは何を指すのか、定義的に存在しないことに気づき二つの計画がヴィーナスより、提唱された人工的に遺伝子を調整しより優れている種を生み出す計画、通称ジーン計画。片方の計画は人工的に機械因子のナノマシンより優れた種を作り出す計画、通称マシンプラン。二つは共に競い合う対比になる計画であり共に補い合う計画でもある、そして二つの計画の実験場に七姉妹海上都市、通称セブンスで行われることになったそうだ。

ヴィーナスが提案した二つの計画から派生する一つの極秘計画が生まれた。それはチューナー計画、それは通常の状態から緊急時の能力の向上変異を行えるという計画は第一段階として変身する能力、通常の形態から緊急態勢の緊急形態に変身する、それにより匿名で

の行動ができる。二つを明確に区別するためのノーマルタイプの変身前形態、二つの計画の先天性者に対抗する能力を発揮する段階の戦闘形態の明確な区別技術の開発。第二段階として緊急形態、通常形態のうち移動、偵察、戦闘の三形態の移行する能力、第三段階として能力そのものの最適化能力の獲得別にその能力を与えられたわけではない、その母体になったのが私の情報だ。

ヴィーナスは変身し、姿を変えた私を特定し、好条件で接触し商談を持ちかけた、それから便宜を図る代わりに遺伝子情報を提供し、おかげで定期的に資金を提供してくれる上に、学生市場独立保護機構の学生として兼業できるようになった。

姿が変わった頃に戻そう、魔法系の妖術を使うと姿が変わり性別も換わる、最初は落ち込んでいたが、長年の相棒に慰められ、最近では達観した。

座標設定、各種情報設定開始、各種情報設定終了、補助機関に伝達、ロックオン、――夢幻の一撃――プログラム開放

開放された魔法系妖術の一撃が複数で一人の女性を脅している背後からの一撃が脅している者に当たる、ただこれは夢幻の一撃の為に真正面から相手が一番恐れる攻撃が襲ってくる、肉体的には傷つかないが、精神的には大打撃で、廃人にはならなくても、当座はトラウマに悩まされるだろう。

「その人、大丈夫？怪我とかない？」

女性はうつすらと見える姿に脅えながらも、コクコクと頷いた。跳躍し接近すると私服の女性だったが、脅えているのは致し方な

いとはいえ礼の一つぐらい言ってもいいと思う。

「あ、ありがとう、それじゃこれで」

「待った、暴漢は務所行き決定でしょう」

「そ、そうですね、じゃ携帯で」

「うんうん」

女性が震える手で通報する、何故脅えるかはわからないが、外見が悪いのだろうか？

「大丈夫悪事を働かなければ襲わないから、一応正義の味方を応援する一般人だから」

「あ、ありがとう」

警察がついたので跳躍し五階建てのビルの屋上に飛び移り、何度も跳躍して姿を消した。

学園の寮に近づくのと妖術の効果が消え、男の姿になる、軽く自己嫌悪をして達観したかのように機嫌の悪そうな顔をして、変身して姿形も変わり性格まで変わる恐ろしさ、具足のおかげで、生体甲殻装甲甲冑その能力のおかげではれずにすんだ、最も元の姿になっても見分けが付かないだろうが。

学生寮と言っても二人で暮らしている、元々は妖狐でマコと名づけて苦痛の十年を共に過ごした。

その結果、兄が渡した古代遺跡からのピアスをお互いにつけ、劇的な成長を見せた、それは私をここまで貶めた相手のせいで、共通な敵の為に協力し一歩手前まで行って惜しくも元の世界に戻されたマコからすれば異世界だった。

魔法と科学が両立し、魔法では文字魔法が主流で、宝珠はいわば魔法道具のような価値だ。

それ程価値はなくても一応データ集めはされたが、魔法が当たり前になり、科学も異常に発展した、それは幻想騎士を作り上げた鬼才、双葉橘と双葉和歌^{ふたばたちよな}、私がドーナツ屋の時の常連で中学生まで妹のような存在だ、双子で片割れは頭脳より素手の方が得意そうな男前だったが、一卵性双生児のようで全く似てないが、最初からの常連の為に常にドーナツの大きさを増やしていた、私とて人の子、最初に客が来れば喜ぶものだ。

その子達と再会し、一瞥してあっさりと私と判別した、似ているのと尋ねると仕草が同じと答えた、ハーフエルフの証拠を見せても換わらずに居た。

それはマコと同じように嬉しいものだった。

ハーフエルフの証拠とは耳のことも在り、両目が非対称、そして人間が操る古代魔法、エルフの精霊魔法の両方を見せたのだ、とは言っても使えるが戦闘センスはないに等しい。

それに二人は珍しそうに見ていた、私としてはもう少し驚いて欲しかったが。

古代魔法は古典に入り古代からの命令形の文字魔法だ、精霊魔法は頼む形になる。

私が直接使う宝珠の力は、どちらにも当てはまらず宝珠を単独で操る自前の能力、大概は威力が強すぎて使い道に困る。

「あんちゃん！」

真上から急降下、それが私に当たる、鈍い音を立て私の背がクツシヨンになり私を呼んだ女の子が起き立つ、ある意味自然な流れだ

が古典派ではないので、そう言つベタな突っ込みは取らず、起き上がり、喫煙席に座る。

「あんちゃん、駄目だよ、タバコは、タバコはね」

軽く脛につま先を当てる、鈍い音と悶絶する悲鳴すら上げられない痛みにお嬢さん。

スモーキング・ジョーから一本を取りオイルライターで火をつけ、タバコを深々と吸い込み、途中で立ち寄った珈琲ショップで買ったハワイの珈琲を飲みながら、タバコを消化していく、もはや喫煙しなければやってられないと言えるほどに元に戻った後は機嫌が悪い。それ以前にタール、ニコチンなどはあっさりと無毒化する、簡単に言えば元々ヘビースモーカーだったからだ。

「あんちゃん」

「なあお嬢さん」

「橘だよ」

「それは知っているが、背後か上を見るといいぞ」

その瞬間橘が横転し、先ほどまで立っていた場所を物騒な刀が断ち切る。

「チッ」

「マコ、いくらなんでも殺人罪でつかまるぞ」

「マコちゃん、怖いよ」

「くっ、天然災害の反応が良くなっている」

「略して天災」

「違う、天然暴走特急災害の略」

「え、マコちゃん、略すなら天才でいいじゃない」

「お前が天才なら私は超弩級の」

「肉食獣」

「そうそう……」

「睨むなよ、好きなドーナツを買ってきたから」

懐からとあるドーナツショップで購入したドーナツを取り出そうとしたら、見事に潰れていた。

「潰れたもので好いか」

一瞬であれば骨をへし折るために拳打ちが決まるが、伊達に鍛えられたわけでもなく、人離れたタフさで平然にドーナツを取り出す。

「ククも大概にしておけ、その化け物ぶり」

「その化け物も刃物馬鹿一代を返上しておけ」

「マコさん、姉さん、ククさん、夕飯が冷めますよ」

「それを言おうとすれば天然災害が急降下するし」

「落ち着いて、ひとまず何故居る？」

「家事が出来ない二人暮らしたと何かと不便で」

「訂正しよう、家事の出来ない妖狐の料理が生物兵器に類似したものだから、その日を回避するために二人を呼んだ、双子の連携家事は見事と聞いたから、餌は私の暮らす寮の事」

「正解、大正解、褒めてくれるかな、褒めるかな、褒めるよね、褒めてよね、褒めるんだよね」

「二人には礼を言おう、家事能力壊滅的の破壊神が光臨するからな、夢も希望もありやしない」

「それ以上いうとマコちゃん自虐ネタを連発するから」

「しねえよ、どこの誰だよ」

「マコちゃんを庇うのに褒めない」

長く深い嘆息の後、タバコを灰皿に入れて立ち上がり、お嬢さんを撫でた。

「わーい、褒められた」

「その食事が」

「行くぞ」

失礼マコこと妖狐の真子だ、元々はとある世界に生活していたところを馬車に撥ねられ、いつの間にか寝かされ、気づけば血まみれで棺の中に居た。

それからはいずれ明かされると思うが、十年相棒といえるククこと久慈久遠と同じようにピアスをして、ヴィーナスが目指すククの全ての能力に匹敵する能力を持つ、本来ならあの天然暴走特急災害の胴体と首をもれなく二分したいが、妹のこともあり、妹の和歌とはなじめそうな感じもあり、今回だけと言って夕飯を頼んだが、余計な異物が付属し。

話がずれた拳句の果てに三体のエンシェントドラゴンを宿し、その能力を行使する生きた伝説に近い万年生きた龍と匹敵する能力に、ピアスで気づいたと思うが劇的に質を成長させる効果を持つために、もはや生半可な物理攻撃は無意味で、十式主力戦車の至近距離の砲弾を片手で叩き落す一部からは化け物扱いされる、その中でヴィーナスの好待遇はありえないものだったが、慣れているかのようにだった。

話がずれたな、世の中には天才は居るらしい、遺伝子戦役で生き残った三陣営、天然種というノーマル、後天的、先天的遺伝子を弄ったジーン、化け物に分類される夜の種族の陣営。その中でノーマルとジーンが共同で暮らす七姉妹都市。

二人に一人はジーンに恨みを持つか、偏見の度合いが強い、それはジーンにも言え、この街の二人に一人が騒動を起こす、おかげ

で揉め事には欠かさない。

どこかの天然災害はノーマルだがジーンを超える頭脳を持ち、和歌の方はジーンと互角の戦いを演じる学園生徒だ、ちなみに私もククも当たり前だがノーマルだ。

真の意味で誰がどの基準で優れているかは分からないものだ。

エピソード？（後書き）

次から本編です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9535u/>

秘の非対称の碧眼

2011年12月3日22時47分発行